

# モネの家



フランス ジヴェルニー



印象派の巨匠モネの家は、パリ郊外セーヌ川沿いにあるジヴェルニーの町にあります。パリで生まれ（1840）、ノルマンディー地方のセーヌ川河口の町ル・アーブルで青年時代を過ごしたモネは、パリで成功することができず、困窮しながらセーヌ川沿いの町を転々とした後、43歳（1883）からジヴェルニーに移り住み、その後86歳（1926）で永眠するまでここで過ごしました。

ジヴェルニーの町はとても静かな姿でセーヌ川にそって横たわっており、モネの家は砂利道の狭い道の脇に味のある表情で建っていました。ここに至ってもまだ困窮の生活が続く中で、モネは美しいジヴェルニーの風景を描き、園芸の本を片手に土を掘、花を植えて庭造りをしていきました。

モネの家は大きなものでしたが、シンプルなだけで面白味に欠けるものでした。しかし、その建物の前に展開する庭の大きさとその見事に充実した園芸の広がり、驚くにしても桁の違いに圧倒されるような気がしました。この庭は花の庭園と呼ばれていました。

ところが庭はそれどころの大きさではなく、道路を隔てて今度は川、池のある水の庭園が展開します。そこには誰にも見覚えのある池と水の風景がありました。モネの大作「睡蓮」の浮かぶ池がこの池だったので。

なるほど水面に浮かぶ睡蓮とまるでキャンパスのように広がる水面の美しさは、モネの絵と想い比べては自然も美しく、またモネの絵はもっと美しく思い出すことができます。モネの家には大きなアトリエがあり、モネの絵はありませんが、多数の浮世絵のコレクションが飾られていました。大雑把な四角い部屋が連なる中で、目を見張るのが黄色で塗られた大きなキッチンとブルーで塗られたダイニングがあることでした。

印象派の画家達はセーヌ川沿いの風景を好んで描きました。モネは自らの手で、長い間求めてきた光と色を現出する理想郷をつくりながらそれを描き、死を迎えるまでの20年以上に亘って水の精に心を奪われ、「彼らの（睡蓮）のおかげでもう眠ることもできない」と友人に語るほど睡蓮を描き続けたといえます。

住宅を学ぶものにとって、この家はとても印象深いものでした。芸術としての高まりもなく、形態としての美しさもない・・・しかし、一人の人間をそこまで魅了しつづけたその行為というものの不可思議な力・・・凄いなー、きれいだねー、楽しいねー、かわいいねーといって、はしゃいでしまいたくなるその力・・・それは単なる興味というものを越えた、愛と呼ぶことがふさわしい、そんな芸術だと思うのです。そして、イシドーさんとその奥様の二人の生活が目に見えて、そこにもまた愛のようなものを背景に感じたりするのです。

